

橋爪大三郎・小浜逸郎

「アメリカ」について

1 多様性としてのアメリカ

—そのメンタリティと制度と文化—

■アメリカの多様性について

小浜 先日ある会で、橋爪さんがゲストスピーカーとしてアメリカについてお話され、私も同席しました。そこで印象的だったのは、この地球という惑星にアメリカという現

象、あるいは存在が現れたとは、はたして偶然なのだろうか、そうではなく必然的な条件があるのだろうか、と問い掛けられ、どちらかと言えば橋爪さんは後者の、やはり必然的なものではないだろうかという展開をなさいます。

アメリカの近年の一連の行動を見ていくと、いかにもアメリカらしい強引さを感じます。そのことを、例えば岸田秀さんは心理学的に解釈しています。アメリカのワフを中心とした人たちが西へ西へと進んでいくときに、それは新大陸ではなく、じつは先住民、イン

ディアンがいた。そこで闘争し虐殺をし、しかしそのことをアメリカは隠蔽している。隠蔽していることによるコンプレックスが反動形成になって、アメリカの強引な対外政策につながっている。これが岸田さんの解釈です。アメリカ人のメンタリティに対するこうした心理学的な解釈に関しては、橋爪さんはどうお考えですか。

橋爪 そういふことはあるかもしれない、とは思いますが、仮にそれがあつたとして、どうして彼らは西に向かつて行ったのか。なぜ虐殺をしたのか。そのことも考えないといけ

ませんね。西へ行って虐殺をしましたというところを前提条件にすれば、そこから先は心理的プロセスかもしれないけれども、その前も考えると、もう少し構造的な条件があるような気がします。心理的な分析というのはあていまいし、効力もあると思うのですが、人間には持ち場というものがあつて、そもそも人間がそういう条件に置かれてしまうと、もう一つ「外側」のことを考えてみる必要があると思います。ですから、心理学的な解釈についてどう考えるかと問われれば、参考にはするけれど、光の当たり方が違うというところになります。

術の最先端を行くというところになっていますが、この辺の不統一や矛盾は、アメリカ人の心理的なものではどう解決されているとお考えですか。

(※アメリカにおいて、公教育では宗教は教えない。信仰と進化論は両立せず、ある宗教によつては、進化論は宗教の一種であると考えられている。従つて進化論を公教育では教えるべきではないという主張がなされ、訴訟問題となっている。)

橋爪 アメリカという国は、自己統治(自分で自分を統治する)が基本になっています。そうすると、自分のことは自分で決めるのが、一番いいわけです。

これを極端に言つと、二億人いれば二億通りの統治があることになりま。すなわち分権的で、多様になる。これではどうしようもないので、じゃあ統一をしよう、という考え方が出てきます。

小浜 橋爪さんのお話のなかにモンキートライアル(進化論裁判*)について触れたところがあつたとおもひつゝ聞かせていただいたのですが、いかにもアメリカならではのなと感じます。しかし宗教対自然科学というパラダイムにわたるとき、進化論全否定の立場は、科学の発展に支障をきたすのではないかと危惧が出てきます。それにもかかわらず、アメリカは一方ではプラグマティックに自然科学をリードしている。科学技

術の最先端を行くというところになっていますが、この辺の不統一や矛盾は、アメリカ人の心理的なものではどう解決されているとお考えですか。

(※アメリカにおいて、公教育では宗教は教えない。信仰と進化論は両立せず、ある宗教によつては、進化論は宗教の一種であると考えられている。従つて進化論を公教育では教えるべきではないという主張がなされ、訴訟問題となっている。)

橋爪 アメリカという国は、自己統治(自分で自分を統治する)が基本になっています。そうすると、自分のことは自分で決めるのが、一番いいわけです。

これを極端に言つと、二億人いれば二億通りの統治があることになりま。すなわち分権的で、多様になる。これではどうしようもないので、じゃあ統一をしよう、という考え方が出てきます。

あるのです。

小浜 その多様性は、アメリカの産業構造の多様性とも連関しているように思います。アメリカというとすぐに都市部を連想してしまふ、非常に進んだ文明のイメージというものがあるのですが、テキサスあたりに行くともうどうも、昔ながらの農耕共同体でやつているわけです。以前、この州だったか忘れましたが、ある知識人がそこを回つてみたら、個人主義的な風潮などまるで感じられなくて、町並みにせよ、人々の気風にせよ、とても一律で、日本なじみよりよほど前近代的な社会のたとえようがありました。ともかくアメリカのイメージはこうと一括できないのです。

橋爪 アメリカという枠を作つてつくる場合、多様性(さまざまな民族からなるコミニティ)を縛つてつくるのは無理なので、ミニマムにミニマムに、最小限の共通項だけを、ただしがり、縛るというやり方にならざるを得ない。

たとえば料理で言えば、アメリカ料理というものはないでしょう。それぞれのコミニティが自己統治ができていない、独裁国家になつたり、変な非民主的な国家になつたりした場合は、基本は自己責任のほうなんです。でも愛他主義的に助けに行つたり、独裁国家が危険な行動をとりそうになつた場合には正義の名において戦争をしかけたりする。それもアメリカの行動様式というところになる。これはなぜなのか、もう少し深く考えるべき問題ですが、ここではこれくらいの説明に留めておきます。

小浜 アメリカは自由の理念を掲げてはいるけれども、州から離脱できない。そのことは不自由である、という主旨のお話がありましたが、これは州の独立性が高いということですね。このことは、突飛な想像になります。江戸時代の幕藩体制と類推できるようなところがあるかもしれません。つまり別の面から見ると、アメリカの自由は不自由を代償としていっているのです。

イが、いろいろなスニツク料理をもっている。もともとは旧大陸から来た料理です。アメリカ料理とは言へば、ハンバーガーとかピザ、コーラとか、そういうものにしかならない。これが、ミニマムな共通項なわけですね。

映画も旧大陸からきたものではないですね。ディズニーとかは、動物が主人公なので、どの民族のコミニティも安心して観られる。これは表面ですが、アメリカの社会構造をみてみると、まずマーケット。市場経済がある。これは、互いの所有権を侵さないというシステムです。これが基本になっています。これは、個人同士がつながり、コミニティ同士がつながる社会の基礎ですから、市場経済を破壊してはいけない。これが、経済的自由を絶対視する思想になります。

それから、政治的自由を破壊してはいけない。これは具体的に、選挙のシステムになるのですが、公職につく者を選挙で選んでいくつて、独裁選挙によらない権力者を絶対に認めない。これも非常に厳格に守られます。が、あとは放り置いて、ばらばら。アメリカはそういう感じの国なのです。

が自己統治ができていない、独裁国家になつたり、変な非民主的な国家になつたりした場合は、基本は自己責任のほうなんです。でも愛他主義的に助けに行つたり、独裁国家が危険な行動をとりそうになつた場合には正義の名において戦争をしかけたりする。それもアメリカの行動様式というところになる。これはなぜなのか、もう少し深く考えるべき問題ですが、ここではこれくらいの説明に留めておきます。

小浜 アメリカは自由の理念を掲げてはいるけれども、州から離脱できない。そのことは不自由である、という主旨のお話がありましたが、これは州の独立性が高いということですね。このことは、突飛な想像になります。江戸時代の幕藩体制と類推できるようなところがあるかもしれません。つまり別の面から見ると、アメリカの自由は不自由を代償としていっているのです。

橋爪 州が離脱を許さないのは、幕藩体制と似ているのではないかと聞かれて、ちょっとはつとしましたが(笑)、よく考えてみると違ふような気がします。

—自分のことは自分で決める、自己統治がアメリカの特色である、というお話がありました。ところが、小浜さんのお話になつたインディアンや最近のイラク問題などをみると、自分たちのことは自分で決めるというあり方は、まったく正反対のことをしている。アメリカにおける他者感覚といふのが他国民感覚といふのか、このへんのことは自由という理念とどうつながっているのでしょうか。

橋爪 大きな問題なのですが、簡単に答ええします。

アメリカの場合、自国のなかに他者がたくさんいます。そこで、自国内のことでは手一杯なので、外国のことには関心が及ばないという面があるかという気がします。自国内のことなら、問題はわりと簡単です。いろいろな人がいて、いろいろなスニツクグループがあり、いろいろな文化を持っている。でも、あなたも「アメリカ人」だろう。アメリカ人なら自己統治をしない。たいていの場合は、これでうまくいくわけです。

外国のことになると、どうなるか。ある国

—アメリカにおける憲法は、アメリカ人にとつてはどういうものなのでしょうか。私自身は、日本国憲法を意識したというところはあまりないのですが、アメリカの社会における憲法はどんな感覚で受け入れられているのか。

橋爪 日本に較べれば、ずっと日常の問題に直結していると考えられています。一つひとつの条文もよく話題になります。これは、憲法の全体をよく読んでいてのことではないのです。たとえば、中絶論争。これはアメリカにおける自由の問題と関係があるのですが、フェミニストたちは「産む性の自由」ということで、産む、産まないは女性が決めることと解釈し、中絶を是とするわけですね。しかし、カソリックなどは、受精した瞬間に人間であり始めるのだから、胎児といふことも独立した人間で、母親の都合で中絶するなんてとんでもない。中絶を禁止すべきだと主張します。しかし

どが違ふかと言つと、韓国というのは、「外」があることは十分に知っているのですが、貿易や軍事的関係など、「外」との交流を一切断つてしまいます。これは、リアリティ世界の現実を無視しているもので、ほんとうに「外」がやってくるたら、壊れてしまうシステムです。しかしアメリカ合衆国は、旧大陸をありありと意識しているわけで、貿易は続きます。外交もやります。軍備もあります。幕藩制と違つて、外との関係を断つていくシステムですから、永続するし、産業文明と共存できます。幕藩制は、産業文明と共存できない。人の移動や物の移動を禁止しているわけですからね。市場経済も、コマとか、限られた特産物だけに限定されている。貿易も原則禁止です。そこで、産業文明になると壊れてしまう。このあたりが、大分違いがあります。

インドが高い。アメリカは世界で一番自由な国だとか、ストリートな肯定感がある。外に悪いものがあるというふうにはなっていない。冷戦時代には、例外として、共産主義、ソ連が悪いと言ってきた。いま、そういう意識は少しゆるくなっている。最近はその代わって、イスラム文明との衝突とか、悪の枢軸とか、テロリストとか、新しい脅威を言い立てる人びともいます。しかし、もともと外国に対する関心も、そこら脅威を受けているという感覚も、非常に稀薄な国なのである。

外国を悪者にするよりも、自分たちのなかに、社会のなかに悪者がいると考える傾向がもともとあったと思います。人種差別もそうですし、昔、排日移民法というものもありました。それを長い時間をかけて克服してきた。これが先どうなるか、気になることです。

■アメリカの地理的条件と

フロンティア精神

アメリカにとっては、インディアスになるわけです。フロンティアの場合も、アメリカに統合することを検討したようですが、それはまずいというので、独立したのです。小浜 国際関係の孤立主義がアメリカの本質であるという以外に、合衆国は広いので、国内的に化外の地のようなところがたくさんあつて、開発の余地があるということもまたあるのでしょうか。

橋爪 フロンティアは、大陸横断鉄道ができあがり、大陸がすべて州に分割された時点で消滅した。そこでさあどうしようというところで、アメリカがアイデンティティ・クライシスを迎えて、アジアに眼を向いたという説があります。

でも実際には、フロンティアを国外に求めるのではなく、あらぬ方向に求めた。あらぬ方向とは未来のこと、未来志向が非常に強まり、エジソンのような発明家とか、新機軸とか世界一とか、宇宙開発とか、未来に向けてうまく切り替えていったのではないのでしょうか。ケネディが出てきて、宇宙開発を推進したけれども、フロンティアスピリット

——北米も南米も同じ新大陸でありながら北米は経済的な繁栄をきわめ、南米はいまだ貧困問題を解決できず、国家的安定も築けずにいるというように、その後の歩みがまったく変わってしまったという世界的事実があります。ひとつは地理的な条件の違いがあるでしょうが、もうひとつは植民地政策の違い、イギリスとスペイン・ポルトガルの違いですね。さあどうしてこんなことが考えられるのか、橋爪さんはどのようにお考えですか。

橋爪 もともと疑問だと思ひます。自然的条件と人為的な条件（とくに移民たちの行動様式）の両方が揃わないとアメリカはいないわけです。自然的条件が、北米と南米では違っていた。植民した人びとも違った。南米は大地所有によるプランテーション作物経営、北米は自作農による自給作物栽培が中心。この、小家族による自作農経営が、アメリカのアメリカらしさの根本になっているのです。アメリカにも大地所有によるプランテーション経営をやっていた南部地域があり、そのことが南部と北部の対立

をひき起し、南北戦争になった。南北戦争が起る前に、トクヴィルがアメリカの内部を視察し、同じ自然条件であつても、入植者の行動様式の違いで、ミシシッピ河の右岸と左岸でこんなに違う社会になっていると報告しています。たいへん参考になる分析だと思ひます。

小浜 こちらから見ている限りでは、特にプシコ政権になってから自分たちが外に向かつて世界の警察を買って出ているというような傾向が顕著なように見えますが、橋爪さんの説が核心を捉えているとすると、それは強引な他国侵略というかたちになって現われることはないだろう、そういう考えになりますか。

橋爪 アメリカは国益を追求するのですが、領土的な野心を持たなかったのです。たとえばメキシコを分捕つてしまえばいいではないか、と日本人は思ひつゝしめられないけれども、メキシコをアメリカにしてしまえば、大量の英語を話さないカリフォルニア、スペイン語を話す人びとがアメリカの一部になってしまう、アメリカのアイデンティティが混乱して

トと言つたのです。科学技術とか教育とか、産業振興とかがフロンティアである。こういう言い方をしています。小浜 というところは、細分化されたといひますか、実際の土地を求めるとは手詰まりになったので、フロンティア精神そのものを生かして、未来に求めた。

橋爪 それはアメリカの国策でもあるわけですが、大学を卒業させ、研究開発投資をして、新技術を開発し、遺伝子を特許登録したりして、将来それが産業化されたら、アメリカにお金が転がり込んでくるようなことをいひ考へているわけですね。

小浜 このフロンティア精神もそうですが、とにかくいへん精神的な国という感じがします。

■マッカーシズムとアメリカの偏狭さ

——アメリカのマッカーシズムについてお聞きします。アメリカには、ハーバード・ノーマンとエドガー・スノーとか三ツク、ある意味ではアメリカ人らしくない知識人があつて

はいと思ひますが、そうしたタイプの知識人が、マッカーシズムによって根絶やしにされてしまったのではないかと、このことが一点です。もう一点は、このマッカーシズムは、そもそもアメリカに内在されていたものによるものか、あるいは冷戦によってつづきと輪郭化されたか、考えるべきなのか。このへんはいかがですか。

橋爪 マッカーシズム、つまり「アカ狩り」。これ自体は冷戦の産物だと思ひますが、しかしその底流として、少数者というか、アメリカの標準的な考えに合わない人びとをどう扱つたらいいかという問題は、ずっとあつたと思ひます。トクヴィルも言ひますが、アメリカは多数者の支配する国である。多数者は自信をもち、驕り高ぶつてゐる。そんなとき、少数者は本当にいたたまれないだろう。影響力もないし、評価もされない。そういう側面はあると思ひます。

——これはまた通りに評価できなく思ひます。アメリカはたしかに少数者に冷たい面はあるが、でも生きていける。影響力はないかもしれないが、小さなメディアがあつて、自分の意見

を発表し続けることができる。世界中の亡命者、世界中で本国にいられなくなつた知識人たちを、もともと多く受け入れてゐる。やはり自由の理念があり、思想信条のゆえに生命が迫害されたり、暴力を受けたりすることに關しては、徹底的に守つてくれる。これで満足できるのなら、アメリカは素晴らしい国だと評価すべきです。でも、そういう少数者の意見がぜんぜん社会に受け入れられないとする、これはアメリカの欠陥と言ひたい。傲慢で、どうしようもない単純なところ、ということになる。ここをどう考えるか、ということなのです。

大恐慌の後に、ニューディール政策が編み出され、連邦政府が膨大な予算を使つて公共事業を行なつて、失業対策をしました。ニューディールという人たちが出てきたわけですが、この人たちの考え方は、アメリカの古典的な考えとは違つて、まず税金を使つて連邦政府自身が何かの仕事をする。それは社会全体の福祉を向上させるものなので、納税者や金持ち個人々人にとっては、必ずしも利益にならないかもしれない。でもアメリカ

のために、こういう政策が必要である、という感じで、簡単に言うとなら社会主義的なのです。社会主義とは、なるべく金持ちから税金を取つて、所得の再配分を行なつて、弱者を救済しよう、政府はそのために存在する、と考えるわけですね。これは古典的なアメリカ人の考え方、政府は自分たちのために存在するという考え方からすると、余計なことなのです。その分、税金が高くなるわけですから。

このニューディールが、アメリカが日本を占領したときに大勢やつてきて、日本の骨格をつつたわけですね。そして本国に戻つたところ、冷戦のマッカーシズムにあつて——彼らのなかには、共産主義の影響を受けた人たちが少しはいました——、大勢の人たちが社会的生命を失つてゐたわけですね。これはアメリカとしてはあつてはならない事件だつた、反省はされてゐます。けれども、当時それで堂々とまかり通つてしまつたのは確かなので、多くの知識人が縮みあがつて、自分の考えどおりに信念を公表できないと思つた。その結果、アメリカがつまらない国になつた。

な紛争のときに、仲裁を求められたりするわけだし、思想信条の違う人が、いざとなるとアメリカを亡命先として選んだりするのだと思ひます。アメリカは住みにくいかもしれないけれども、小浜さんの思想が弾圧されたら、どうしますか。

小浜 うーん、なるほど。難しいところですが、やっぱりそのときはアメリカを選ぶかもしれないですね。ただ私は、言論人としての小浜は自分のすべてではなくて、重要なパーツの一つにすぎないといういひかけなどがあるから、書きたいことが書けなくなつたのなら、自分の気に入らない時代思潮に迎合する言論をものするよりは、どつか都会の片隅か、片田舎にでも引込んで何とか糊口をしのいでいく道を選ぶかもしれない……。それも一種の思想だなんて勝手に思ひます。

■アメリカ文化の特性と「押しつけ」

——アメリカ文化についてお聞きします。アメリカには、ミニミティがあり、そこには独

た、というところはあつたかもしれない。共産主義は、非合法ではなけれども、やはりイデオロギーが絡んでくる、たとえば「私は共産主義者になつて言つたら、アメリカでは、社会的に相手にされないと思ひます。そうした偏狭さはあると思ひます。アメリカの自由とは何だろう、平等とは何だろう、というの永遠の課題です。自由を否定する言論はいいが、自由を否定する行動はいけないと言われたりもします。でも、自由を否定する言論だけでも、相手にされなくなつてしまふ。

小浜 有名な言葉がありますね。「私は自由を否定するあなたの意見に反対ではあるが、あなたの言論を阻止しようとする行動に対しては、命を懸けてもあなたを守る」でしたか。橋爪 それは、思想の段階ではそうなのですが、アメリカはもともと「信教の自由」でつくつた国ですから、その原則に關しては右も左もなく、すべての人が一致してゐると思ひたいと思ひます。そこがアメリカの一番信頼できるところで、だからこそ世界中のいろいろな

自の文化があるというお話をしたが、その独自の文化とアメリカ全体の文化との関係と、この二つを考えた方がいいかということ。もうひとつの質問は、アメリカは自国の文化を世界に広げようとしていくわけですが、その過程において伝統文化的なものと対立することがあるわけですね。そのことをアメリカ人はどう考へてゐるのか。この二つはいかがでしょうか。

橋爪 文化についてはあまり得意でないのですが、やっぱりそれとなく言ひたいので、うまく答えられるかな。アメリカでは、いろいろなスターが出てきまふ。スターは、それぞれのミニミティから出てゐるわけですね。たとえばマドンナはイタリア系とか、エリザベス・テ일러はユダヤ系とか、一般の人びとはみんな、どこのミニミティから出てきたのか、知つてゐるわけですね。ミニミティだけで評価されているうちは、ビッグではない。そこから出てきて、他のミニミティの人びとにも、たとえばギリシヤ系だけれども、ギリシヤ系以外の人びとも好かれるようになった。その段階でスターに、一流のミニミティ・アーティストにな

つていく。このへんの感覚はとても面白い。日本であれば、この人は何系だ、ということとはほとんどないですね。せいぜい出身地方が意識される程度です。在日コリアンのスターは例外かもしれませんが、たとえばプロレスの力道山の場合、日本人のファンは、外国人の悪役と戦つた日本人レスラーとして応援し、在日コリアンの人びとは自分たちの代表として応援してゐた。背景を必ずしも公表しません。アメリカでは、さまざまな背景のいろいろな人びとがいて、それがアメリカだ、だから楽しいんだと思ひつてゐる。そういう感覚のようですね。

一番目の質問は、単純ですが射撃の大きい問題です。

ある人に面白いことを聞きました。ユダヤ教に詳しい方なのですが、ユダヤ教徒は、ユダヤ教を布教しない。なぜならユダヤ教の原則では、正しいのは神であり、人間は間違ふので、正しいものを他の人に押しつけても仕方がないわけだから布教しない。彼に言わせると、キリスト教徒がキリスト教を布教するのは、キリスト教は正しいと、クリスチャ

ンが考えているからなのです。この話が、アメリカ人とまで関係があるかはよく考えるとして、ある意味で言っているところがある。

アメリカが、何かの価値観をひとに押しつけている場合には、まず、それが正しいと考えている。そして、すべての人びとがそのように考えたり行動したりすべきだと考えている。だから、あなたの方方はやめて、このやり方にしなさい、と主張するわけですね。実際には、アメリカもそこまでナイーブではなくて、いろいろな現代思想が出てきています。文化的多様性とか、伝統固有文化を尊重しようとか、アメリカ人もいろいろ言います。けれども、ヨーロッパに較べると、そういうことは下手ですね。

たとえばイギリスはもっと狡猾で、インドを支配するときは、インドの固有文化を大切にすることを、インドの価値観を大切にさせて、自分たちの価値観を押しつけないわけですね。でもそれは支配するための手段で、インド人のエリートが行くための大学をインドにはつくらない。イギリス本国に

いかですか。

橋爪 五〇年代のアメリカと、最近の日本の現象は、たしかにいくつか共通項があると思います。

アメリカは、一九世紀は農村社会で、過半数の人口が農村に住み、家族経営の自作農を営んでいたのです。ところが農業が機械化され、大規模経営になつてくるのに並行して、零細経営の農家は立ち行かなくなつて、多くの人びとが都市に出てきます。ちょうどそのころ、自動車産業をはじめとする重工業など、いろいろな産業が起り、ブルーカラーやホワイトカラーの職種が増えた。大恐慌を乗り越え、戦争で好況になります。そして、中産階級が形成されて、アメリカ的生活様式が完成したのが、だいたい一九五〇年頃なのです。教育もある程度いきなり、子どもたちが目標をなくすのです。こんなに豊かで、父親は汗水たらして働いて、やつと郊外に一戸建ての家を買い、それでなんだ、というふうな生意気な感覚になつてくる。

日本の場合も、昭和二〇年代には、大部分の国民が農村に住んでいて自作農だったんで

連れてきて、英語を教育する。もしも価値観を押しつけて、インドに学校をたくさんつくついたら、五〇年もすると、その価値観を武器に独立してしまうわけですね。アメリカの場合には、お人好しなのか、おつちもこいかなのか、何も考えていないのかわからないけれども、イギリスにくらべると、自分の価値観を相手に押しつけたがる。それが文脈をはずれていて、相手にしてみれば余計なお世話だということはあると思うのですが、多数者の傲慢といえますか、自由に対するほれ込み方というのは、深い無意識に根づいている側面があって、簡単にやめられないわけですね。

小浜 それは岸田秀さんの、インディアン虐殺説とも通じますか。

橋爪 南アフリカであればまだ分かりますが、アメリカではどうでしょうか。

小浜 ではヨーロッパに対するコンプレックスはどうですか。

橋爪 コンプレックスはあるでしょう。

アメリカには、いろいろなコンプレックスがあります。ひとつには、歴史・伝統がないこと。

す。そのあとほとんど農村から都市への人口移動が起り、中産階級が形成される。それからさらに一代が経過した。いまの若い人たちは、親もサラリーマンで、親もそれなりの教育を受けていて、だいたい親と同じような生活になつていくのだらうなと先が見えてしまい、ちつとも面白くない。この閉塞感、五〇年代のアメリカの閉塞感と、よく似ているところがあります。

たとえばリーマンは「伝統志向型」(伝統的価値観に依拠して自己形成)、「内部志向型」(古典的アメリカ人で、個人の価値観に忠実)、「他人志向型」(大衆社会に伴ない、他人の価値観に左右される)と人間を三つの類型に分けました。その「他人志向型」の行動様式の間が増えたとか、消費社会への移行とか、ポフカルチャーだとか、流行現象とかが、いまの日本と似ているのです。けれども、いまは二十一世紀で、インターネットがあり、グローバル化が進み、冷戦が終わつていて、いろいろな新しい面がある。現在の若い人たちは、リーマンの応用では分析できないと

一九三〇年頃までは、ヨーロッパに行くところ、アメリカ人というだけで笑われたのです。どうせ礼儀作法をわきまえず、バカなことをいう田舎者なのだから、笑つてやれというわけ、からかいの対象になつてた。今でもアメリカン・ジョークというものがあつて、オーストラリアに行けば、アメリカ人は笑われるし、ヨーロッパでも、アメリカ人が来ると、かきでアメリカ人の悪口を言つて盛り上がるというのはいくつもあるわけですね。

■アメリカの一九五〇年代と現代日本の適合性

——アメリカの社会学者についてお聞きします。パーソンズ、サムエルソン、リーマンなど、彼らアメリカの社会学者を見直す時期なのではないかという気がするのですが、というのは、彼らが活躍した一九五〇年代、六〇年代のアメリカに、いまの日本には符合するところがあると思えるからです。彼らを見直すことで、いまの日本の状況を分析する参考になるのではないかと考えているのですが、

2 覇権主義と孤立主義

—グローバル化とアメリカ

■アメリカの世界戦略の底流

——領土的野心がないというお話が少し前にありましたが、アメリカの植民地政策についてお聞きします。グアム、ハワイで、キューバであり、そしてフィリピンもそうですが、アメリカもかつての大国の植民地政策と同様のかたちで世界覇権を考えているのではないのか。たしかにイギリスやスペインと較べると強硬な植民地政策ではなかったと思いますが、それは、すでに領土分割がなされたあとだから、時代性の違いではないでしょうか。

橋爪 もちろんアメリカも、列強の一員として、イギリスなどと共通の行動様式をとるの

は当たり前で、そうやってアメリカの国益を追求していった。

でも、イギリスと較べると、いくつか根本的に異なる点があると思います。まず、イギリスはたいへん小さな国で、原材料を海外から輸入し、販路を世界に求めなければならぬという繁栄の仕方ですね。そういう繁栄の条件を作り出すために、スペインと争い、オランダを破り、数世紀にわたつて戦略的に世界に君臨してきたわけですね。

アメリカの場合、資源が豊富で、国内市場が膨大で、イギリスと違って十分に国際貿易から遮断されたとしても、十分に自給している。そういう条件に恵まれている。このことが、イギリスほど海外領土を持たないで済むという、根本の条件の違いです。それからイギリスと違って、地方分権的な傾向が強い。孤立主義を外交政策として採用しているというよりも、そもそも人びとの関心のあり方が、地元のことにたづなつて世界のこととはどうでもいいというふうなスタンスにたづなつていっているという点も、イギリスと違つて思えます。

■アメリカ経済と中国

ただアメリカの安全保障のために、制海権がなければいけなかった大陸といつても安全ではないわけですね。独立戦争後しばらくは、イギリスが大西洋の制海権を握つていたから、艦隊を持たないでも済んだ。アメリカの艦隊は、おもちゃのようでもよかった。そのあと、だんだん自前の海軍をもつようになつてきて、ある時期から非常に大きな海軍力をもつようになります。ブルーウェーブ、ネイヴィイ(外洋型の海軍)をもつて、海軍基地が重要になる。太平洋方面はハワイ、グアムとか、あちこちに基地をもつことが根本的な戦略になるわけですね。

このことは、植民地をもち、そこから資源を収奪し、製品を販売する、という考え方は違つていないか。フィリピンの場合には実際どうかなど、詳細に見ていかねばなりませんが、アメリカの進出は世界分割が済んだうえでの新しい展開で、古典的な植民地政策では説明し切れない発想や戦略によつていのではないかと思います。

な。たとえば鉄鋼産業に関して関税を高くするというのは傾向があり、これが世界からの批判を浴びていますね。あるいは京都議定書会議でもサインをしないとかですね。産業問題や環境問題での孤立主義的側面が出てくると思うのですが、EUや日本は、プッシュ政権のやり方に対して、経済的なサンクションをすでに決定しているそうです。アメリカがグローバル化を推進するのとこのあいだで、アメリカ自身にとつてもひとつの矛盾としてとらえられると思うのですが、そういう点をアメリカはどう克服していくのか、この点について、何かお考えはありますか。

橋爪 米中関係と、国際貿易の枠組についてのお質問ですね。

まず、米中関係には、いろいろなシナリオ予測があるのですが、中国がめざましく経済成長をとげるという点では、どの予測も一致しています。中国の人口はアメリカの五倍、日本の十倍あるわけですが、二〇二〇年あたりの比較的早い時期に中国経済はアメリカと並び、最終的には、アメリカの二倍

——経済についてお聞きします。端的に言うて、アメリカにはグローバル化とアメリカナイズという二つの面があります。資本主義経済の普遍化や拡張をはかるという面と、一方でローカル主義と孤立主義とされるように、閉じこもつとする面があるように思いますが、その点いかがですか。

橋爪 世界で、国際貿易がなくなつてもやっいてける国はいくつもないのですが、アメリカは確実にその国のひとつです。かつてのソ連や、中国も、何とかなるかも知れない。それ以外の国々は、貿易をしないとやっいてけないわけですね。アメリカは自由貿易を尊重しますが、それがもたらす自国のためなのかは微妙なところがある。

「貿易の利益の理論もおさえておくべきでしょう。サムエルソンというアメリカの経済学者の論文にもありますが、貿易によつてどんな国がおもに利益をうけるかというと、資源の豊かな大国ではなく、資源が偏つていて自給のむずかしい国、たとえば日本なのです。こうした国は、貿易によつて豊かになる。」

近頃の経済規模になるといふ予測が多い。日本は、アメリカの半分の人口規模しかなくて、ピークのときに、アメリカの六割から七割ほどの経済規模になつていくとあります。これは名目上の数字で、為替レートのいたずらという面もある。中国は人口が多いので、ほんとうにアメリカを追い越してしまうでしょう。となると、それが政治的・軍事的な優位に反映して、アメリカの覇権を脅かす可能性が大いにあると心配されています。

自由貿易との関係ですが、自由を掲げる自由世界は、一國経済ではなく、貿易の利益を追求するわけですね。保護貿易と自由貿易では、自由貿易のほうが、どの国も利益を得られる。これはどの経済学の教科書にも書いてある基本的なところで、自由貿易は大きいことなわけですね。プッシュ政権もこの点を踏まえ、自由貿易を支持している。

では、なぜ自由貿易に反対する場合がありますのかというと、ひとつは農業です。農業は、土地に密着した家族経営で、どの社会にも伝統がある。そこに自由貿易を持ち込むと、安い農産物が外国から入つてきて、農業が壊

壊れていくからなのです。この話が、アメリカ人とまで関係があるかはよく考えるとして、ある意味で言っているところがある。

アメリカが、何かの価値観をひとに押しつけている場合には、まず、それが正しいと考えている。そして、すべての人びとがそのように考えたり行動したりすべきだと考えている。だから、あなたの方方はやめて、このやり方にしなさい、と主張するわけですね。実際には、アメリカもそこまでナイーブではなくて、いろいろな現代思想が出てきています。文化的多様性とか、伝統固有文化を尊重しようとか、アメリカ人もいろいろ言います。けれども、ヨーロッパに較べると、そういうことは下手ですね。

たとえばイギリスはもっと狡猾で、インドを支配するときは、インドの固有文化を大切にすることを、インドの価値観を大切にさせて、自分たちの価値観を押しつけないわけですね。でもそれは支配するための手段で、インド人のエリートが行くための大学をインドにはつくらない。イギリス本国に

減的な打撃を受ける。フランスの農民がよく、ミルクを川にまいたりしますけれども、それに怒っているわけです。もうひとつは、幼稚産業の保護。せっかく工業化が始まって小さな会社ができつつあるのに、自由貿易をやると外国の製品が入り込んで、その国の工業が全滅してしまう。そこで産業化の初期には保護貿易。産業が成熟したら自由貿易、これが普通なのです。

アメリカは、農業を守る必要性が一番少ない国です。中国にはかなりの数の農業従事者がいるわけで、本来なら、自由貿易にすれば大変なことになる。でもWTOなんかには入れない。そういう国です。でも、かなりの覚悟をして入っている。これは、十年二十年をかけて、農村を根本的に改造しようという意欲の現われなのですね。そこまでリスクを冒して、世界貿易の枠組みの中に入れていこうとしている。アメリカは、本来なら、そうやって自由貿易を採ろうか探るまいか迷っている弱い国に対しては、保護の手を差し伸べつつ自由貿易の利益を享受させる、という大きな責任がある。その責任を守らないと

自分の国の都合で京都議定書から脱退して石油をどんどん消費しようという構えだ。なんと無責任なのではないか。自国の利益と世界利益が二つに成り、自分でも区別がつかないといった現象のひとつだと思います。日本としては、そういう矛盾をきちんと突いて、アメリカの環境政策や産業政策に異論をのべていく。場合によっては、差し出がまし

いようだが、代案を提示する。そういう役割と責任があると思います。安全保障ではアメリカとしっかり同盟し、環境政策や産業政策では反対していく。この点とこの点はアメリカのやり方はおかしい、というふうにあやまりを指摘していくことが大事だと思います。安全保障に関してはとにかく支持するしかないのですが、このこととアメリカ社会のあり方について文句をつけることは別のことです。

小浜 どちらかと言えば、プッシュ政策における保護貿易的傾向はよくない。日本やEUが批判的である、そちらの方が正しいと。橋爪 アメリカにとっても利益にならないと

な関係に戻ったわけです。それは台湾問題もあるし、いろいろ将来の展開を考えると、とて、私は健全な変化だと思っています。もつとも、9・11のあと、中国に妥協する必要が生じて、ゆるんでいますが。

■国連とアメリカの問題

小浜 こ数年の一連の国際紛争で、アメリカが主導的立場に立っていて、そのことについて国連が相対的に機能低下しているという事実がありますね。アメリカは、国連をあまり信用しない傾向がありますが、このアメリカの認識は、私はある程度現実的で正しいという感じがするのです。これから国際間の共存を、どうつくっていくか、どういうあり方があるか、端的にいえば、現在の国連は、もつとリフォームが必要なのではないかという気がするのですが。

橋爪 国連は、外交官のサロンといった性格が強く、実質のある機関とはいえない。その国連をリフォームして実質を持たせるのは、時期が早いと思います。

アメリカは、自国に都合のいいときは国連を利用するが、肝心なときには国連を無視する、ということをくり返してきたわけです。国連は、第二次世界大戦が終わったときにつくったのですが、もともとかなり無理な点がある。安保理の常任理事国が五ヶ国あって、その指図のもとに国連軍をつくる世界平和を維持するということになって

けでとてもできないのです。統一の指揮権のもとに、各国の軍隊が従うというやり方は、弱小国が単独では行動ができないから、強い国にちよとまかせてもらう、という場合には成立しつかない。でも、強国がいくつも集まって国連軍をつくるのは、とても難しいことなのです。そもそもアメリカは、そんなものをつくるつもりもないし、そんなとくにアメリカの兵士を送り込んで、命を落としたり国内で説明ができない。それぐらいなら、アメリカが単独で行動すればいい、と思っています。

国連軍は、なぜできないのか。国連軍ができると、常任理事国五ヶ国共同の参謀本部ができ、その参謀本部の指揮権を持つわけですね。アメリカ人にしてみると、アメリカ大統領やアメリカの参謀本部は、はなからアメリカ兵が国連軍となつて、国連の参謀本部の指揮に従わなくてはならない。アメリカのために命を落とすのならまだしも、外国人の作戦や指揮に従って、自分や部下が命を落すなんてまづびらだ。そういう感覚になる。

一般に、連合軍というものは、そういうわけでもない。個別の業界には、世界貿易に巻き込まれると競争にたえられず、潰れていく弱い産業もあります。そういう産業を整理していかないと、アメリカ全体の強さは保てないのです。アメリカは相対的に、世界で一番強い国なわけですね。アメリカにも弱い産業はあるでしょうが、そんなことを言えば、世界中の国々にある。そこでアメリカは、率先して市場を開いていく責任がある。プッシュ政策にそういう保護主義の傾向があるとすれば、それは気の迷いである。そう、日本は言うてやればいいのです。

思いますよ。個別の業界には、世界貿易に巻き込まれると競争にたえられず、潰れていく弱い産業もあります。そういう産業を整理していかないと、アメリカ全体の強さは保てないのです。アメリカは相対的に、世界で一番強い国なわけですね。アメリカにも弱い産業はあるでしょうが、そんなことを言えば、世界中の国々にある。そこでアメリカは、率先して市場を開いていく責任がある。プッシュ政策にそういう保護主義の傾向があるとすれば、それは気の迷いである。そう、日本は言うてやればいいのです。

小浜 アメリカの経済人、つまりあまりポリティカルではなく、自分たちの利益を追求したいという人たちに、中国というマーケットはひじょうに魅力的だと思つて、すね、これからはほとんど関係をもちようとするでしょう。この辺はプッシュ政策のやり方はうまくないという気がします。

橋爪 クリントン政権がかなり融和的な姿勢を示したのにひきかえ、プッシュ政策になつてからは、戦略的パートナーではなくライバルである、という言い方になり、もとの対抗的

アメリカが借りをつくりたくないという、孤立主義的傾向が前面に出てきたときに、直接脅威のもとにある日本が、アメリカと緊密に連携する一方で独自の基本戦略をきちんと立てないといけない、ということになりませんか。

たが、冷戦が終わつても、ソウルの問題があるからなかなか動けなかったとて、北朝鮮が九四年に核を持てた。手が出せない状態になった。ここから始まっている。北朝鮮はあまり長くもたないだろう。そうたかをくくって、解体するかどうか、様子を見ていたわけなのですが、どうもそうでもない。となると、何か手を打たなくてはならない。

北朝鮮人民軍でしょうが、そうしたクーデターが起きないよう、かなり巧妙に、二重三重にガードが固められている。とは言え、どこかで偶発的な事件が起つて暗殺やクーデターが成功するといふ可能性もゼロとは言えないし、ちよとシナリオを書けないのです。

ふつとCIAが考える手順として、暗殺クーデターがあるのですね。中国に、それをやつてくれないかと打診したフシもあるのですが、中国はできる能力はあるとは言いませんが、やることは言わなかった。私は、中国にその能力はないだろうと思っています。

小浜 パレスチナ問題やイラク問題で、当事国の国民の反感感情が増大していくというの

は居場所を探れないように警戒して、いろいろな手を打っています。また、かりに金正日が死んだとしても、そのあとどうもまじな状態になる保証はないわけですね。親米的な政権ができて、では開国しましょう、と都合よく言い出すかどうか。また、クーデターを起せるとしたら、側近・フランス

アメリカが旧大陸に干渉するといふことは、本来のアメリカのあり方を逸脱しているわけですから、旧大陸の側にしてみれば、そんな介入を納得する合理的な理由はないわけですね。旧大陸のどの国も、みんな固有の伝統があり、自分たちの固有のやり方で近代化を達成して、それなりに自由への道を歩一

■日本に何ができるのか

——日本の対米関係と対中国関係についてお聞きします。今回のイラク派遣などの問題が、今後ますます議論の俎上に乗せられてくるだろうと思います。このことに関して、さうとうアメリカの意向を汲みながら、あるいは圧力を受けながら決定されていくのではないかと。つまり日本がどこまで自主的な決断ができるのか、ということが一点目の質

問です。もうひとつは、そのことによる中国
韓国との関係の問題です。中国、韓国はな
り害制してゐると思うのですが、関係が悪
化するのではないかと。緊張関係のなかでど
う中国との関係を考えていったらいいのか。
この二点、あわせてお聞きしたいと思いま
す。

獨断、もちろんアメリカと政策のすりあわせをして、同意の下でなければ、同盟国としての日本はこういう行動もできない。それでも、アメリカと相談しなければいけないことと、アメリカとは独立の意思をもつこととは、別なことで、独立の意思をもつからこそ相談ができる。アメリカに言われなくても何もしないとは、ぜんぜん違ふ態度です。アメリカ独立の意思をもつために、国内で議論を戦わすというのは、健全な姿です。

それから、中国、韓国との関係ですが、日本が核武装したり、MD（ミサイル防御）システムを、また、防衛態勢を構築したりすれば、中国は嫌な顔をするだろうし、韓国も面白くないと思います。私は、核武装は日本にとつて賢明な選択ではないと、一貫して思っています。

のか。これが問題になります。

そうすると、アメリカ以外で、アメリカに並ぶだけの物質的成功を収め、アメリカに近い自由を享受し、文明として成功している、こういう例が必要になる。ヨーロッパは、アメリカ文明の母胎となっている西欧文明の本家で、かつての植民地帝国主義あり、第三世界から言わせればモデルにはならない。すると、あとに二つがあるかと言へば、日本なので、中国もあるけれども、まだ自由とはいえない。日本は、まがりなりにも議會政治を行ない、かつてアメリカと戦争もしたけれども、平和的で、国民も幸せそうにしている。日本がもうひとつのモデルになるというのは、そういう意味なんですが、アメリカにくらべて一人当たりの資源の使い方が半分である。努力すれば三分の一、四分の一になるかもしれない。と言つことは、アメリカモデルに上らなければ、同じ資源を使つて三倍、四倍の人びとが、日本のような文明を享受できる、といふことなのです。

日本は、そういう意義を世界に対して、とりわけ第三世界に対してもつのだというこ

ます。それはいい結果を生まないだろうと判断している。中国は、核兵器と導弾手段をもっていますから、日本を脅威とは見ていないので、そこまで神懸賞にはなっていないだろうと想います。

日本を脅威と見るとすれば、台湾海峡が緊張して中国が軍事行動を起こすと共に、アメリカが出てきて、日本も共同行動を起こして衝突が起こる、というケースなのです。

私は逆に、アメリカと日本が、台湾の軍事解放を阻止する軍事的能力を持っていたほうが、中国のためになると考えています。その能力がなくなると、台湾を解放しないのは北京政府の責任だ、と中国人の多くが考えるようになり、大きな国内問題になる。もちろんアメリカと日本の軍事力を合わせると中国より強いので、台湾を解放できないと言えれば、外国のせいであって、北京のせいではない。中国国民の皆さん、こゝは我慢してください、と言えろ。これは北京にとつて、本音で言う、いい話なのです。そう私は考えるので、日本は、中国が口で何と言おうと、台湾海峡で軍事行動を起こす中国のオアシ

とを、かつてアジアの盟主「氣取りだつたの」とはまた違ふ意味で自覺して、自分の文明を洗練させ、いく。アメリカとは共通なところもあるが、それでもアメリカとは違ふモデルを提示する。こういう役割があるのではないでしようか。自由貿易にせよ、市場経済にせよ、民主主義にせよ、アメリカと共通する側面が多いけれども、でも日本はアメリカとあきらかに違う。日本がアメリカに代わるもうひとつのモデルを提供するとは、アメリカにとつてもプラスになると思ひます。

(本対談は、橋爪氏による「人間学アカデミー」第3期講義「アメリカ論のさ」に行なわれた小浜氏との二回にわたる対談を元に再構成し、両氏の加筆を経て掲載されたものです。なお両氏以外の発言は受諾された方々の質問を佐藤の責任においてまとめなおしました。橋爪・小浜両氏ならびに各位にお礼とともにお断りします。尚、橋爪氏の「アメリカ論は年内にも」を古本新書として刊行される予定です。…佐藤記)

ヨンを理想のものとしないうに、アメリカと協力していくことが必要だと思えます。

——これから何が世界の共通の極端論として、アメリカ方も認め、他の国にも受け入れられる、そういうものをどうつくっていったらよいか。またそのとき、日本はどのような役割を果たすべきなのか。この点についてお話ぐださい。

橋爪　なかなか難しい質問ですね。

アメリカ的なアイデアのうち、アメリカが世界の中でもっとも魅力のある国になっているのは、自由という考え方だろうと思う。アメリカは、自由の国だ。そこでは、個人が自分の人生を、自分の意思によって思うままに展開できる。どの国の人でも、アメリカに行けばそのチャンスが手にはいる、というところにあると思うんです。ただ、アメリカに行かないかぎり、その可能性が手に入らない。自由からシャットアウトされる。ここから抑圧感が生まれるわけです。世界中の国がアメリカになってしまうわけにはいかない。アメリカでない国がいかに、アメリカに近いかたちの自由を手に入れていく



2004年〔平成16年〕7月30日

橋爪 大二郎著

言語／性／権力

橋爪大三郎社会学論集

「社会学のにおい」(序)

(3) 意) などと言われると奇妙な印象を持ってしまいかも知れない。しかし、かつて社会学専攻の学生だった者には妙に納得させられてしまふものがある。最近の社会学の教科書ではほとんど見かけないが、片隅に追いやられているが、かつての社会学の教科書の定番は「社会学の創始者」コントの三段階の法則から始まって、社会有機体説や社会進化論、形式社会学、理解社会学などといった記述が続いていた。そういった記述の背後に感じられる、社会のすべてを残らず説明し尽くそうという執拗な意志、それが「社会学において」

橋爪氏の構想する理論社会学はすでに『言語派社会学の原理』(洋泉社)や『橋爪大三郎コレクション』Ⅲ『(勁草書房)において、その基本的な枠組みが明らかにされている。言語の形式性を基底に据えることによって、意味を重視する主観主義と意味を無視した客観主義、現象学的リアリティ(リアリティ)(リミクロ)と唯物論的リアリティ(リアリティ)(リアクロ)の対立を乗り越え、本書のタイトルにあるように「言語／性／権力」の三つの作用力から出発して、社会理論を構成しようという「言語派社会学」の構想がそれである。

である。

本書は、橋爪氏がここ一年あまりの間に、理論社たのか？ 本書の第1章

会学の領域で発表した論文（社会はどういう空間であることを集めたものである。内容（社会はどうか）では、ある日、自

的には多岐にわたり（第1分が世界の中心であるという事実に気づいたときの奇部言語と社会をめぐる）

／第Ⅱ部 規範の言語と権
／第Ⅲ部 変容す 妙な幼児体験から、間身体
力的生起としての言語を導

る社会関係)、それぞれ独立した論文であるが、それぞれ独り占めされている。ここでは別の

には「社会学のにおい」に補助線を引いてみたい。橋導かれた持続的な意志が、爪氏が学生時代に書いた

◇ 言語派社会学の構想 ◇

群を抜いた包括的なプログラム

亘 明 志

◆ 言語派社会学の構想 ◆

群を抜いた包括的なプログラム

亘 明 志

演劇の比喩で語られること
がある(たとえば、「役割」
概念などはその最も定着し
たものである)。しかし、
橋爪氏にとって演劇とは比
喩ではなく、現実の社会を
相対化し、虚構として構成
しなおす意志なのではない
か。この演劇的意志は言語
派社会学のなかにも脈々と
受け継がれている。それが
「社会学において」でもあ
った。

ただ、この「人類学的演
劇論」では言語の特徴を「話
す」離す」と捉えているこ
とから窺えるように、疎外
論的な論理構成をとってい
た。その後、言語派社会学
の構想が明確になるにつ
れ、疎外論的な論理は否定
され、記号論的な構成にと
って代わられる。もちろん、
そこにはソシュール言語学
や記号論、フーコーの言説
分析、とりわけヴィトゲン
シュタインの言語ゲームの
アイデアとの出会いがあっ
たのであり、橋爪氏にとっ
てのいわば「言語論的転回」
があったに違いない。その
反響は本書の第一部、言語
と社会の関係をめぐる諸章
から聞き取ることができ
る。

構造・機能分析以降、社
会学における理論パラダイ
ムの混乱の中では、群を抜
いて包括的プログラムを備
えているのがこの言語派社
会学の構想であろう。本書
は、このような言語派社会
学の構想に従って書き次が
れた論考であり、言語派社
会学の生成と展開過程を理

勝するうえで貴重な論集といえる。(わたり・あけし)
 氏「長崎ウエスレヤン大学
 教授・社会学専攻」
 ★はしづめ・だいさぶろう
 う氏は東京工業大学大学
 院教授・社会学専攻。東
 大大学院博士課程単位取
 得退学。著書に「言語ゲ
 ームと社会理論」「仏教
 の言説戦略」「冒険とし
 ての社会科学」「橋爪大
 三郎コレクションー
 Ⅲ」「性愛論」「言語派
 社会学の原理」など。一
 九四八(昭和23)年生。

構造・機能分析以降、社会学における理論パラダイムの混乱の中では、群を抜いて包括的プログラムを備えているのがこの言語派社会学の構想であろう。本書は、このような言語派社会学の構想に従って書き次がれた論考であり、言語派社会学の生成と展開過程を理

[illegible]

46判・334頁・2625円
春秋社
4-393-33225-3